
『非』日常への階段～頭隠れ編～

寧祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『非』 日常への階段〜頭隠れ編〜

【Nコード】

N6751A

【作者名】

寧祈

【あらすじ】

親の転勤で一年だけ遊鳥村で暮らす事になった主人公・雄介。だが、雄介の知らないうちに、非日常はそこまでせまっていた…。

巻・頭隠れ（前書き）

これは短編「『非』 日常への階段」の続編という形で書いています。前作を読まれていない方には分かり辛い部分もあると思いますが、お付き合いください。

壱・頭隠れ

親の転勤の関係で、預けられることになったこの遊鳥村　ゆとりむら。

一年だけという理由で仕方なく来た村だったけど、今ではけつこう気に入っている。前居たところじゃ、恋人どころか友達もいなかったから…。

「おはよーっ、雄介　ゆうすけ　君！」

「おう！実弥　みや」

クラスメイトの、望月　実弥　もちづき　みや　。まだ村の事をよく知らない俺に、親切にしてくれる。

「今日数学の宿題やってないんだ。写さしてー」

「しっかたねーなあ、実弥は」

「えへっ。お願いー！」

そのまま少し歩くと、見慣れた光景が目に入った。手をつなぐ、恋人のような男女の組。

「おはよう」

「おはようだよ」

「おおっ、結城兄妹！朝から仲いいねえ」

二人は恋人のように見えて、じつはれっきとした双子兄妹！結城　光流　ゆうき　ひかる　（兄）と、光理　ひかり　（妹）本当に仲がよくて、いつも一緒にいるんだ。

「雄介と実弥だって、恋人同士みたいだよ」

「みたいだねっ」

「ええーっ、やーだあ！」

「こっちから願い下げだぜ？実弥なんて」

「あっ、ひどいよ、雄介君っ！」

皆で笑いながら登校、たわいもないおしゃべり。

こんなにも当たり前前の事…前までは思いもしなかった。考えもしなかった。そんなのがないのが、俺にとっての『当たり前』。時間に追われて必死に勉強。それだけで精一杯だった。

でもここには、置いていかれないように、教えてくれる先生がいる。置いていかれたら、なぐさめてくれる友達がいる。だから、勉強が遊びみたいに楽しい！

朝家を出て、友達と話して、学校に着いたら先生が会話に混ざって…この村では、ゆっくり時間が過ぎていく。

こうして、俺達の長い一日は終わる。

「ね、皆で帰ろうよ！」

実弥がいつものように、光流・光理に声をかける。いつもなら、笑ってうなずく二人。それが今日では、申し訳なさそうに眉を下げていた。

「今日は…ちょっと…」

「ちょっと…ね」

光流が実弥に耳打ちする。とたんに、実弥ははつとした顔になった。

「そっか、明日……だもんね」

「ごめ……。……だから」

何を話しているんだ…？離れた位置にいる俺には、会話のどこが抜けて聞こえる。

俺は戻ってきた実弥に、さっきの事を訊いた。

「光流達、なんて言ってた？」

実弥はふつと表情を固まらせた。そして、そのまま俺をじつと見ていた。

「実弥？」

実弥は固まった表情のまま、俺を見つめたままで、口を開いた。

「分かんない」

「え？だつてさっき話して」

俺がそこまで言った時、実弥がぐつと腕を握ってきた。ぎりぎり
と、実弥が俺の腕を締めつける。痛い、痛い、痛い！女子とは思え
ないその力に、俺は声も出せない。

「あたし、分かんないって言ったよね？」

実弥が言った。

「言　　っ　　た　　よ　　ね　　？」

「い、言った！」

「じ　　ゃ　　あ　　分　　か　　っ　　た　　で　　し　　ょ　　？」

「分かった！分かったから…」

ぱつと、握られていた手が離された。実弥が笑顔で言う。

「そっか、分かったんだね？じゃあ帰ろっ」

い…今のは…？ただ、光流達がどうなのか訊いただけで…？あんなに怒ってる実弥、初めて見た…。

「行こ？雄介君」

「あ…ああ」

俺はかばんを持つとして、激しい痛みに襲われた。実弥につか
まれた腕だ…もうアザになって、紫色に変色してる。

「あつ、ごめんね…い、痛かったよね…？」

実弥が、自分でやったとは思えないほど優しくなり、俺の腕をさ
すってくれる。本当に、さっきの実弥と、この実弥は同じ人物？
そんなおかしい考えが、頭をよぎる。

「お　　ん　　な　　じ　　だ　　よ　　」

実弥がぼつりと、でもはつきりと言った。
最初俺は、何を言われているのか分からなかった。

「ど　っ　ち　も　『実弥』　だよ」

背中を冷や汗が伝った。

どうして…俺の考えてる事に答える事ができる！？
何も、一言だって、口には…実弥には言っていない！！

「…そんな事より、早く帰ろーよ」

実弥が、いつもの柔らかい表情で言った。

実弥は元に戻ったけど…さっきの『実弥』は…俺の知らない、何かのような気がした…。

巻・頭隠れ（後書き）

ここまで読んでくださって有り難うございました。これからも頑張
っていききたいと思いますので、どうかよろしく願います。

式・村の伝承

分からない事が二つ。一つは、結城兄妹の会話。もう一つは、いきなり態度を豹変させた実弥。俺に隠したい事でもあるのか…？ 今日に至っては、結城兄妹は学校にも来ていない。実弥は何も言わないし、先生も深く説明しようとしない。

「…なあ、実弥」

「うん？」

ちよつとためらいもあつたけど、聞かなきゃ気が済まない。

「光流達つて、どうしたんだっけ？」

「光流と光理なら、お父さんの仕事で東京だよ。今日にはちゃんと帰ってくるって」

「……………え？」

そ…それだけ？

「なあんだっ！心配して損したぜ。何かさ、深刻そうだったから気にしてたんだ」

「きつと、遊鳥村を離れるのが嫌だったんだよ。雄介君は心配性だね」

実弥が笑う。

「そうだな…」

こんなのかな村で、変な事なんてそうそうないよな…何考えてたんだろ、俺。

「それより雄介君、早く座らないと先生が来ちゃうよ！」

実弥に言われて席に戻ったとたん、先生が勢い良く入ってきた。助かったーっ。実弥がこっちを見て少し笑う。

でも、実弥の事ではまだ安心できない。まだ、腕にアザが残っている…。

結局その日は、実弥が気になって授業が全く身に入らなかった。

「雄介君、帰ろう?」

実弥に誘われても、俺は乗り気にはなれなかった。

「……よしとく。悪いけど」

実弥がいきなり悲しそうな顔をする。

「い…一緒に帰っちゃダメかな?」

「俺、用事あるからさ」

本当は、用事なんてないけど…。

「どうしてもダメ?」

っ、何だ?今日はやけにしつこく言うな。

「今日、何かあったか?」

「うん、今日はね、『肩褓い』があるんだよ」

「カタ…バライ?」

「そう、お褓いでね、身を清める儀式なんだよ。雄介君も、村人として参加しなきゃ!」

お褓いか…。そういう類は、一切信じていない。そんな事を言われても、行く気は出なかった。

「俺、忙しいから」

俺がそう言っただけで帰ろうとすると、実弥がぼそとつぶやいた。

「時乃神が来る」

俺はぴたりと足を止めた。つぶやきに足を止めたんじゃない。ただならぬ殺気を感じたからだった。

「行かないと」

「……っ」

「行かないと時乃神が来てしまう」

実弥が、昨日みたいに…ツかれたように…。

「実弥…？」

俺が呼ぶと、実弥ははつと我に返ったようだった。でも、

「一緒に行こ？」

こう言うのはやめない。

「俺、用事済ませたら行くからさ…先行ってるよ」

なるべく動揺がバレないように言っただつたが、それでも声が震えた。

実弥は満足したようにうなずき、神社の場所を教えて行ってしまった。

「……何なんだよ、アレ…」

ツかれたような実弥、不思議な名前の神様、肩袈衣の儀式…何なんだよ、全部全部…。

もやもやしたまま家に帰ると、見慣れない女の人が立っていた。じつと俺の家を見つめている。

「あの、どうか？」

俺が声をかけると、その女性はにこつと笑って俺の方を向いた。

「あら、ごめんなさい。私はこういう者」

女性が名刺を差し出す。名刺には、『折原 祈 おりはらいの』という名前が書かれていた。

「よく遊鳥村に遊びに来てるのよ。この村に興味を持っていてね…。前来た時にはこの家、なかったわよね？それで、気になっちゃって…確かに俺の家は、最近越して来たばかりだ。まだ建てて一ヶ月程度しか…。

「はあ…。あ、俺、雨宮雄介って言います。折原さんは、もともと遊鳥村の出身じゃないんですか？」

「ええ、そうよ…でも、遊鳥村の知識にだったら自信があるわ。例えば、『時乃神』…とかね」

実弥が言っていた…時乃神。

「あの…時乃神って、何なんですか？友達にも言われたんですけど、俺分からなくて」

折原さんは少し意外そうな顔をし、それから答えてくれた。

「時乃神はね、遊鳥村の神様。村人達の良き守り神。ただね…」

「ただ？」

「こわあい神様でもあるの。汚れたものをひどく嫌う…。汚れた罪人の所には、時乃神がやって来る。だから、身を清める儀式、肩抜いには、参加するのが鉄則なのよ」

それで実弥はあんなに言ってたのか…。遊鳥村の話を知っていたから…。

「遊鳥村の事が知りたいなら、これはどうかしら？」

「へ？」

折原さんは、手持ちのかばんの中からノートを取り出した。

「私なりに調べた、遊鳥村の話。また一週間後に来ようと思ってるから、その時にまた会いましょう？」

「え？でも…」

「ふふっ、いいからいいから…。じゃあね、雄介君」

折原さんはきびすを返し、家の前から去っていった。残されたのは、俺と、このノート。俺は息を軽く吸い、ノートを開いた。

俺の知りたい事が、このノートに書いてあるかもしれない。

弐・村の伝承（後書き）

第弐話です。連載ホラーがこんなに大変だとは思ってもみませんでした。

参・儀式…肩被い

折原さんのノート。俺の知りたい事が、書かれているかも…。

「雄介君っ」

後ろからいきなり肩を叩かれて、俺は振り返った。そこには…実弥。

「雄介君、肩被い行っただ？」

「ま、まだだけど…」

「えへへ、そうだと思っで、迎えに来てあげたんだよ。さ、行こっ」
「実弥が俺の腕をぐいと引っ張る。ったく、おせっかいというか…」

世話好きというか。

「あ、そうだ雄介君」

「何だよ？」

「雄介君の『用事』って、折原さんに会う事だったの？」

「んーと…」

そうしておいた方が都合がいいよな。

「そうだけど」

「…何お話しした？」

「……何でそんなこと訊くんだよ」

「ぴた、と実弥の動きが止まる。実弥は微笑を顔に貼り付けたまま言った。」

「聞かれたくない話でもしてた？」

「こ…これは…」

「時乃神の悪い噂を吹き込まれたでしょ？肩被いが何か訊いてたでしょ？」

顔では…笑っているけど…

「知ってるよ？聞いてたよ？私ぜーんぶ聞いてたよ」

怒ってるんだ…俺が折原さんに会った事を。

「ね、雄介君？約束しょ？」

「な…何を？」

「雄介君は折原さんと話しちゃダメだよ…？雄介君までおかしくなっちゃうじゃない」

おかしく…？それを言うなら

「ゆびきりげんまん うそついたら はりせんぼん のーます…」
真顔でこんなこと言うてくるお前が

「…やっぱり はりせんぼん じゃあ許さない。 はりいちまんぼんのーます…」

実弥の方がおかしいんじゃないか！？

「ゆびきったあ」

実弥がにたりと笑う。その時俺は…約束を破ったら本当に針一万本を飲まされてしまう気がして…不安でたまらなくなった。

情けない事に、肩が震えているのが分かる。こんな普通の女子中学生に、実弥にこんな…恐怖心を抱く事になるなんて 思いもしなかった。

「…約束もしたことだし。肩被い行こっか？」

「あ…そうだな、行くか」

実弥が無邪気に笑っている。さっきの歪んだ笑いなんて想像できない。

なあ実弥…お前は本当は、どっちの実弥なんだよ…？優しく笑う実弥は、本当の実弥じゃないのかよ…？

神社

神社に着いた俺は、

「何だよ…コレ？」

と、声をもらしてしまった。

「…肩被いだよ。皆、はやくお被いしてもらいたくて必死なの」
必死…だって？

だからって…村人全員が集まるようなものなのか！？

すぐ横で、お被いの順番争いの殴り合いが行われている。神社の
中心部では、叫び声が響いている。

ただの村の行事が…お被いが…警察沙汰になったっておかしくな
い勢いじゃないか！！

「雄介君もちゃんと肩被いしてもらおう？」

「お…俺、いいよ」

「へ？」

「俺、肩被いなんてしなくていい！」

正直に…こう思っていたんだ。

だって…皆異常だ。実弥だけじゃない…。

「どうして？雄介君…ッ」

実弥が俺の服を引っ張る。俺は本能的に、その手を振り払った。

「ゆ…雄介く…」

「もうっ…俺に触るなあ！！」

「ひっ…」

俺の気迫にひるむ実弥を残し、俺は神社から逃げ出した。

「ゆうすけたたりけっただね」

実弥がこうつぶやいたのも、知らなかった。

「おかしい…村全体、全部おかしい…」

この考えだけは、はっきりしていたけれど。

参・儀式…肩被い（後書き）

なんだかまとまりのない話になってしまいました。
読んでくださった方に感謝&ごめんなさい。

死（四） ・ 光理の決意

家に帰った俺は、折原さんのノートを探した。肩被いについて調べないと…。

「あれ…？」

肩被いに行くとき、玄関に置いてきたと思ったのに…靴箱にも、玄関マットの下にもノートがない。どこに行った？誰かが家に入った訳でもないし、盗まれた訳でもないだろうに…良く考えろ、肩被いに行く前は俺が持ってた。そこに緋唯が来て、俺を連れて行くとした。ノートを玄関に置いて、神社に…。待てよ？あの時緋唯は俺の後から遅れ気味に歩いてきた。玄関にかぎはかけてなくて…ノートを持ち去れる状態　！！よりによって緋唯にノートを持っていたのかれた？くそつ、最悪だ…！折原さんになんて言えば…。

俺が玄関で立ち尽くしていると、電話のベルが鳴った。こんな時に誰だ？

「はい、もしもし…」

「あつ、雄介君？光理…だけど、今いい？」

「お、おう…光理。東京からは帰ったのか？」

「東京！？」

光理がすつとんきょうな声を上げた。

「え？東京行ってきたって…実弥が言って…」

「あ…そ、そう…帰ってきたの。所で、今から雄介君の家に行ってもいい？」

「急ぎの用なのか？」

「む、無理だったらいいけど…早い方がいいかな…」
「じゃ、今から来いよ…」

10分ちよつと待ったか。光理は俺の家にやって来た。なぜか巫女衣装を着て。

光理は俺の目に気が付いたのか、笑って

「この服、変？」

と訊いて来た。

「いや…別に变じゃない」

俺はそう言いながら、光理を居間に通した。冷蔵庫に入っていた麦茶を光理に渡し、床に向き合って座る。

「で、何だ？」

「あ…うん。色々話したいことがあつて…私の事と…肩抜いの事と…折原さんの事と…実弥ちゃんの事と…整理付かなくてね、頭の中ごちゃごちゃなんだ…けど、聞いてくれるかな」

俺は冷静なふりをしながら、本当は動揺しまくっていた。俺が今まさに直面している問題ばかりじゃないか。

「……実弥ちゃん、いっぱいウソついてるよね？」

「ああ…」

「私は…ウソとか、隠し事とか…そういうの無しで、皆で仲良くしたい。だから、私の話聞いてくれる？絶対ウソもつかない、隠し事もしない。知ってる事なら何でも話す。この…遊鳥村の事」

麦茶を持つ手が震える。俺は麦茶の入ったコップを、床に置いて手を握り締めた。

「その前に1ついい？雄介君、肩抜い来てないよね？」

「悪いかよ…あんなモン行つてられねえよ、俺」

「責めるつもりで言つたんじゃないの。確かめたかっただけ。私、肩抜いの実行委員だから知ってるだけだし…。それでね、せめてこれだけは持つて欲しいな…なんて」

光理は巫女衣装の中から、小さなお守りを取り出し、俺に差し出した。

「肩抜いの…お守り」

「俺、神様とか信じてないけど…」

「まず、持っててよ。守ってくれるからっ」

いつもは大声を出さない光理が、今日は声を荒げていた。

「…このお守りは、対時乃神用じゃないの。対村人用　なの」

「村人？　一体どうして」

「見た…んでしょ？　肩褓いで、村の人の様子。皆おかしいんだよ。

だから、肩褓いに行つてないなんて知れたら…だいたい分かるよね？　どうなるか。このお守りは肩褓いに来た人にしか渡してないからお守りが証拠になつてくれるよ。だから、持ってた方がいいと思うの」

俺は光理があまりに真剣なのに驚き、受け取る気の無かつたお守りを手に取ってしまった。

「じゃあ…本題に入るよ？　ちよつと楽しくないお話になるけど…雄介君は受け止めてくれるって信じてる。だから、この機会に全部話したいと思う　…」

死（四） ・ 光理の決意（後書き）

次こそ、光理が秘密を告白してくれるように頑張ります…。展開が遅いです、すみません。こんな小説を読んでくださる方々、本当に有り難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751a/>

『非』日常への階段～頭隠れ編～

2010年11月18日14時22分発行